委員会調査（研修）報告書

NO.

平成29年10月17日

胎内市議会議長
森　田　幸　衛　様

（報告者）　桐生清太郎

総務文教委員会行政視察　について、
議会会議規則第１１０条により、下記のとおり報告します。

調査・研修 日　時	自　平成 29 年 7 月 10 日 至　平成 29 年 7 月 12 日 2 泊 3 日（ 3 日間）	調査・研修 場　所	10 日　埼玉県滑川町 11 日　千葉県香取市 12 日　埼玉県春日部市

調査・研修 事　項	1，埼玉県滑川町役場　「給食費無償化について」 2、千葉県香取市　「防災ステーション川の駅について」 3，埼玉県春日部市　「龍Ｑ館・首都圏外郭放水路」
調査・研修 出席者(参加者)	委員長　桐生清太郎　副委員長　坂上清一 委員　丸山孝博　委員　渡辺俊　委員　森田幸衛 委員　薄田智　委員　佐藤武志　委員　天木義人 議会事務局長　佐藤一孝
相手方(対応者)	滑川町議会　北堀議長 他４名 滑川町　吉田町長他３名 香取市　国土交通省 佐藤専門官他３名 春日部市 第３セクター職員数名

調査の結果または概要

○給食費無償化について　（埼玉県滑川町）

総務文教委員会は給食費無償化について、埼玉県滑川町で研修を行いました。滑川町の給食費無償化は、吉田昇町長の22年の選挙公約であったと言うお話でした。22年10月に話が出て23年4月実施するには1月までにすべての予算原案を組み立てなければならないという厳しい短期間の仕組み作りでした。当時給食費の無償化自体全国的にあまり例がなく、近隣では茨木県大子町で行われていました。大子町では補助金交付方式でした、この方式では補助金交付事務・給食費徴収事務など作業が煩雑になり、事務作業が増加するなど問題があり、埼玉県、文科省に質疑し徴収免除を引き出し、徴収免除の方式で給食費の無償化が実現しました。

給食費の無償化で大きな問題は財源です、財政調整基金を取り崩して賄っていますが今後継続して行く上で財源の確保が課題に上がってくるで有ろうと言うことでした。

滑川町では町外の保育園・私立の小中学校に入園入学の全ての児童生徒を対象にしています。無償化以前の給食費の滞納額はその後少しずつではあるが減少しています。

地産地消に取り組んでいますが、お米は滑川町産のキネヒカリを100%使っていますが、それ以外は安定した品質・供給量の調達が難しく地産地消の活用に至っていないが今後活用できるよう進めていきたい。

調査の所見・感想

東武鉄道の森林公園駅が始発で東京へ50分で通える好立地に有り、毎年数パーセントの人口増加が現在も続いている滑川町。給食費無償化の予算額は7000万円の予算で、それも僅か数ヶ月で取り組んだ、これも財源の裏付けが有ってのことでしょう。

大都市圏のベットタウンとして好立地環境の中で、町以外へ通学の子供達も全て対象とした事も画期的で有ろうと思う。給食費の無償化で補助金交付する方式ではなく徴収免除を行うに当たり、関係機関との調整を行った事により、事務負担の軽減及び未納入者の回避など多くのメリットが得られる仕組みになっておりました。

尚無償化以前の給食費滞納額も無償化により滞納者の意識も変わりつつ有り徐々にでは有るが返済も進んできているなどの効果が出ている。

2、防災ステーション川の駅について　（千葉県香取市）

香取市は平成23年に1市3町で合併し、当初87000人の人口でした現在71000人で10年間で約1万人減少しています。当市は農業が基幹産業で特に米は県下一の生産量を誇っています。

防災ステーション川の駅は国と地方自治体が共同で行う、PFI事業として行ったのは、全国でも当時としては珍しく2例目でした。

道の駅、川の駅、親水・湿地ゾーンとして整備され、事業費203億5000万円で国土交省と香取市が整備した道の駅と川の駅が一体となった全国的にまれな施設であるそうです。香取市はこの事業に60億円を負担しています。道の駅、川の駅、開業前来場者数は８２万人と見積もっていたが150万人を超え、物産館の売り上げも2億円に達しており開業5年で現在売上県下一位です、年間2億円を売り上げるまでになっており観光客の増加、小売販売額の増加などで市のにぎわいに貢献していると評価されています。

一方で他地区への影響については好意的な見解も有る一方、道の駅の登場は佐原駅周辺の個人商店の経営状態の悪化につながったとの見解もあり。もともと佐原市が策定した中心市街地基本計画では、交流拠点の核となる「ファーマーズモール」を整備し、新たな交流拠点とする計画であったが、ファーマーズモールは開発業者が撤退したため現在実現していません。

調査の所見・感想

香取市は大都市東京の隣に位置して入るにも関わらず、人口減少が止まらない、昨日研修した滑川町のように人口増加を続けている自治体とのギャップの要因はどのように理解したら良いものか。道の駅とは全国至る所にあるが、川の駅とはあまり聞いたことがなく耳新しく思えたが、この地域は利根川を始め大きな川が5本も交わっている地域で水の郷さわらと聞くと納得です。また江戸の末期に日本地図を作った伊能忠敬の出生地であり、文化遺産に指定されたお祭り、重要伝統物群と言う事で保存された観光地として位置付けられていることなど観光の拠点としても大きなインパクトを持っている。

３，龍Ｑ館・首都圏外郭放水路について　（埼玉県春日部市）

国土交通省江戸川管理事務所が管理している、江戸川・中川・綾瀬川です、江戸川は工業用水、農業用水、水道水として約１０００万人の飲用水として活用されています。綾瀬川は全国でも汚れた川でしたが年々水がきれいになっています、中川流域は利根川と江戸川の反対側を流れる荒川の大きな川に挟まれており、くぼんだ低い地帯で浸水被害の多い地域であり、国、県、住民一体となり総合治水対策に取り組んできました。

更に浸水被害軽減のため首都圏外郭放水路計画が平成５年に着手し平成18年完成しました。この放水路は小さな川の洪水の時には大きな川、江戸川に流すための地下の巨大な貯水槽と放水時の排水機場など重要な施設は全て地下にあります。

地下施設は５０メートル地下にあり、直径１０メートルのトンネルでつながっておりこの施設、調圧水槽は川とはつながっていないが他の４本の立坑とつながっています。調圧水槽は４台のポンプで水位調整をしながら江戸川へ放水しています。先週も大量の水が入っていました。調圧水槽の広さは幅78メートル奥行き177メートル高さ18メートルの大きな地下空間で、柱がたくさんあり地下神殿のようだと言われています。

柱の幅２メートル長さ７メートル高さ18メートル重さ500トンの柱59本全体の重量で水の浮力をおさえています。川の水とともに泥が入りますので、この見学場所は昨日スコップで泥掻きをしました、全体はブルドーザーを入れて泥掻きをしています。集めた泥はクレーンで地上に上げ、江戸川の堤防などに使われているそうです。

調査の所見・感想

大都会近郷の巨大な地下施設、実際この目で見るまでは半信半疑でした。どのようにして洪水調節をするのか直接目で見て聞いて確認して見たい思いの研修でした。

近隣に特別変わった建物もない小高い丘に２階建ての建物が龍Ｑ館・首都圏外郭放水路でした。中川・綾瀬川流域は利根川・江戸川・荒川の河川に囲まれ、低地で水が溜りやすい皿のような地形になっており、大雨が降るたびに洪水被害をくり返した地域であったそうです。地下階段を降りると地上からは全く感じ取れない異様なほど巨大な地下神殿のような建造物に目を見張るものがありました。私たちが訪問する10日ほど前の大雨で放水路は水で湛水していたそうです。その水の排水にやっと数日前に終え今日の研修受け入れ可能になったそうです。大都会の安全、安心の確保には人の知恵と現代技術の推移を駆使した大事業の上で地域の安全が保たれていることが実感できた。